

そよかぜ通信



みんなハッピーな 学び方

東京大学教授 **池谷裕二**先生

新しい教育課程では、

「主体的で対話的な深い学び」(アクティブ・ラーニング)の
実現に向けた学習方法が課題とされています。

このような学び方と脳にはどんな関係があるのでしょうか。

脳研究者の池谷先生にインタビューしました。



生活科・総合通信

そよかぜ

通信

2019年
秋号

目次

みんなハッピーな 学び方

東京大学教授
池谷裕二

異なる力を合わせて、 自分と他人を持続可能に

上智大学准教授
丸山 英樹

カメラを通した生活科 ～お気に入りのボツ写真から～

カメラマン
斎木 三佳子



表紙イラスト: づかあけみ

体験を通してこそ、脳の内側と外側が結びつきます

脳は、神経細胞、神経回路を持ち、回路の中で発火活動みたいなものを持っています。それは、外界とはまったく関係なく、生まれたときから自発活動をしています。そして、外界とインタラクションすることによって、脳の中の活動に意味を与えています。それが、学習であり成長です。パンッと生まれ出て、内側から内発的動機として、外とインタラクションしようというモチベーションがないと脳の内側と外側は結びつきません。小さい子どもたちは、「脳の

中のモヤモヤとした活動というのはいったいなんだろう、ああ、なるほど、これって手を動かしている感覚なのか、これってモノを見ているのか、これって触っている感じなのか…」というように、経験を通じて具現化して、対応環境を与えていきます。それが学習であり成長だと思います。小さい子どもはそれが非常に大きくて、小学校1、2年生の頃はまだまだ高い時期です。

「人間らしさ」を生かした学びが大切です

脳の学習プロセスの中には、「速い学習」と「遅い学習」といえるものが二重に動いています。結果をすぐに求めたがる場合は「速い学習」が重視されます。いわゆる「わかった!」です。学校教育は、そちらを重視する傾向があるのではないのでしょうか。

僕は、成長とは「遅い学習」だと思うのです。「わかった!」ということを重視しすぎると、「遅い学習」がうまく進まなくなってしまうんです。「遅い学習」は、脳の脳皮質ではなくて、小脳や線条体を何度も訓練することによって身につくもので、そこには、「わかった!」感がありません。例えば、自転車に乗ることがそうです。「乗れた!」という瞬間は、確かにありますが、「わかった!」という感じじゃない。途中時点では、「乗れた!」という感じがなく、徐々に体が上手く動くようになっていく。実際に乗っていないわけです。そのモヤモヤしている感じ、「成長しているのかしていないのか、自分でもモニターできていないんだけど…」というあの段階を、

すごく大切にしなければいけないと思っています。

「速い学習」を重視する始まりは、乳児が初めてつかまり立ちしたり歩いたりしたときに褒めてくれる、あれではないでしょうか。別に褒められなくても、歩くんですよ、子どもって。野生の動物の子どもとか、歩いても別にほめられません。ほめなくても立派な大人になるわけで。わたしたちは、「わあエライねえ!」というのを過剰にやって、それを重視することに偏重しすぎています。「速い学習」は、人間が言葉をもったことも大きいですね。言葉をもったことは、学習を効率化かつ高速化するのですが、一方では、わたしたちの心のカタチを縛っているともいえます。言葉を上手に使えることで、脳が進化の過程で養ってきた本質的な面を見失いがちになっているのではないのでしょうか。そもそも「人間らしい」ところは「動物らしい」ところの上に乗っています。「遅い学習」がない限り、「人間らしさ」は活かせません。どちらも大切です。

「大人の言うことをききなさい!」は、現代社会がつくった幻想?!

これまでの学校では、先生が教えるものとされてきた面があると思います。大学でも「アクティブ・ラーニング」を取り入れ始めました。黒板を使って教えていたのを一切やめて考えさせる。先生が教えない授業方法は、教師側としても勇気が必要です。1時間で教えていたことが3時間かかることもあります。勇気もあるし、効率も一見悪いような気がします。でも、大きな視点で振り返ってみると、人生において非常に重要な糧となります。生活科は、本質的にそのような学習方法ですよ。本人もそういう学び方への性能がまだ衰えていない年頃です。

そもそも、子どもは大人の言うことをきくようにデザインされていません。このことは、学び方の本質にすごく関係があると思っています。今でこそ、親が子どもを育てるのは当たり前で、子どもも親の後を付いて行くという社会ルールがつくられているけれど、そもそも、子どもたちは、あまり親から物事を吸収していなかったはずだと思うのです。なぜかと言うと、こうやって定住して家族を作って農業を始めたのは最近で、1万年経ってない。長く見て10万年。でも人類は、原始人まで入れたら500万年くらい前からいるわけです。言葉を変えると99.8%はこういう生活をしていなかったんですね。だから、長い進化の過程で、定住してこんな生活をするために脳をつくってきたのではないのです。食料を安定的に供給するには定住のほうがよいけれど、でも、こういう生活は、生物にとっては不自然でストレスも多いわけです。発達障害も、社会や学校という枠がなかったら発達障害というのはなくて、現代の社会や学校がつくっている障害なのではないかとも、僕は考えています。

話をもとに戻すと、では、定住する前の子どもたちは誰に育ててもらっていたかという、親ではないんですよ、という話をしたくて。いろいろな資料を歴史的にみてもみると、おそらく当時は、お父さんは誰かわからない。お父さんがわかる動物というのはすごく少ない。サルでもわからないですからね。おそらく、当時の人間もほとんどわからなかったと思います。でも、お母さんはわかる、自分が生みましたからね。では、お母さんが子育てしていたかという、おそらくしていない。お母さんの仕事は、哺乳類として、おっぱいをあげることだったろうと思います。だから、2歳くらいまではお母さんが育てていたかもしれないけれど、それ以降、お母さんは育てられない。なぜかと言うと次の子を妊娠しているからです。で、生まれると、また新しい子におっぱいあげて、やっと手が離れたと思ったらもう次には妊婦さんです。極端に言えば、妊婦さんか授乳しているかです。

では、子どもたちは誰が育ててくれるのか。お兄ちゃんお姉ちゃんですね。で、実際に子どもは子どもの言うことをよくきくけれど、親の言うことはきかない。それは、反抗心というよりは、そもそも脳が、進化の過程で、親から習うようにはデザインされてきていないのです。だから「親の言うことをききなさい!」「先生の言うことをききなさい!」「大人の言うことをききなさい!」というのは現代社会がつくった妙な幻想でしかない。その中に閉じ込められたら子どもが可哀想です。

このことを裏付けすると、例えば、私がアメリカに転勤になった時点で、子どもはしばらくすると英語を話すようになり、日本語を話さなくなります。

友達が英語で喋っているからです。つまり親とのコミュニケーションなんか、たいして重視していないんです、子どもは。友達とのコミュニケーションを重視するから、親との言葉を忘れて、友達の言語を取る。それが、子どもは子どもから学ぶという決定的な証拠であるように思います。

もう一つ付け加えると、おばあちゃんも子育てしていたと考えられます。生物というのは自己複製して生命を残すことを最大の使命としているわけですが、人間の場合はまったく当てはまらない。生命と

しての役割を終えたあとも、おばあちゃんというのは孫を育てるために生きているんです。実際に、おもしろいことに、自分の子よりも孫のほうが可愛いと感じるんですよ。これも生物学的な1つの証拠です。

おそらく、昔の社会では、子どもたちはお兄ちゃんお姉ちゃんからいろんなものを学んだけれど、お兄ちゃんお姉ちゃんだって何でもできるわけではないですよ。村の掟のこととか、狩りの仕方とか、複雑な料理を作るとか、火を上手に扱うとなったら、おじいちゃんおばあちゃんの出番です。

子どもが子どもから学ぶのは、自然な学習スタイルです

そういう背景を前提に考えると、対話的で協働的な学び方というのは、実は、子どもが子どもから習うというプロセスなんです。先生から一方通行で教えてもらうのではなく、子どもたちがディスカッションして答えを探していく。人間学を考えたときに、非常に自然の理にかなっている。自然な学習スタイルだと思います。そういう意味では、生活科というのは、本来ある姿に戻す教科という感じが、僕はする。だからこそ、先生のあり方が大切です。どの科目よりも難しいと思います。先生にも忍耐力が求められる。

行政がシステムを見直して、そういう環境をもっとたくさん子どもたちに提供できればいいの

ですが。カリキュラムもあるし、教えなければいけないこともあるから先生も忙しいですよ。でも、先生方が、子どもどうして学び合うことが自然な学習スタイルであることを知っているだけでも、ちょっとしたことが変わらと思うんです。

だってそれは、子どもたちにとってハッピーなだけではなくて、大人側にとってもハッピーなんですから。



池谷裕二先生 プロフィール

脳研究者。海馬や大脳皮質の可塑性を研究する。『パパは脳科学者』(2017クレヨンハウス)『脳はみんな病んでいる』(2019新潮社)『生きているのはなぜだろう』(2019ほぼ日)など、脳科学の知見をわかりやすく紹介する一般向けの著書多数。

異なる力を合わせて、 自分と他人を持続可能に

上智大学准教授

丸山 英樹

■はじめに— 正義とユーモア

「正義魔人」という表現が、台湾にはあるそうです。大なり小なりの「正しいこと」を他人に求めて、攻撃的になる「魔人」とのことで、日本でも実在することをときどき確認できます。たとえば、身動きできない東京のラッシュアワーの中で、ご老人ご自身が「年寄りに席を譲らないとは何事か」と問い詰める。オンラインの世界では、140字という短文ではすべてを表現できえないのに、「その表現は不適切だ、間違っている」と炎上する。相手に失礼のないようにと、どんなに暑い日でも就活生は黒いスーツを身にまとうのも「魔人」を恐れるがゆえの行動ともいえます。

外からみると学校教育は、いろいろな人の住む社会における共通のルールやマナーといった規範を効率的に受け継いでもらえるように機能しています。学校で良い子として育ったならば、あるいは逆に学校では悪い子だったからこそ、社会に出て良い子でありたいという気持ちを抱かせることになります。誰もが気持ちよく過ごせる社会が理想なのですが、



丸山 英樹先生 プロフィール
専門は比較国際教育学、国際教育協力論。持続可能な社会構築に向けた幅広い教育の源泉と成果などを研究。著書には『ノンフォーマル教育の可能性（共編著）』（新評論）などがある。

満員電車といった息苦しいほどの不快な状況では、つい正論を押し付けてしまうのも仕方ないのかもしれませんが。短気者な私自身も、電車の遅延のため駅員さんに詰め寄る人の気持ちはわかります。しかし、その場で駅員さんは遅延を解消できませんし、責任をとることもできません。

海外出張先でも、似たようなトラブルが起こることがあります。たとえば、飛行機が遅延し、次の便に乘れなくなる時のストレスは大きいものです。ある時、ドイツ国内で乗り継ぎできなくなり、最終便まで待たされることがありました。ドイツ人の職員さんは、自分の責任ではないから、絶対に謝罪なんかしてくれませんし、淡々と「あなたのフライト時間は、これです。ではまた。」と新しい搭乗券を手渡してくれただけでした。

丁寧さ・従順さで世界的に評判の日本人のマナーとしては、静かに搭乗時間を待つべきだったのかもしれない。しかし、お腹が空いていて、空港内の店は定時に閉店ということもあり、その資格（ステイタス）は無かったのですが、「ラウンジを使わせてくれ」と職員さんに申し出ました。返事は「ダメです。貴殿のエコノミークラスでは使えません」と正論でした。ここで引き下がるべきところ、「いや、そうだけど、他に誰もラウンジを使っていないようだし、この時間だから、あと数時間でスープは廃棄するわけでしょう？だったら、お腹空かせた、惨めな旅行者の胃袋へ流し込んでよいではないか？」と私が言うと、頑固そうな職員さんは笑いながら「今回だけです」と通してくれました。勝利のスープをすすりながらも、ラウンジの清掃員さんに迷惑かけないように、控えめに過ごすことで日本人らしさ

を發揮しました。

図々しいにもほどがある！「魔人」に知られたら、吊り上げられるかもしれません。でも、ここは海外。しかも職員さんが通してくれた。では、職員さんが糾弾されるべきでしょうか。笑わせることができなかつたら、彼女は忠実に職務規定を守り続け、ラウンジ内ではスープが捨てられ、私は空腹に耐えていたでしょう。「魔人」にとっては理不尽な話でしょうが、私なりに思うのは、ユーモアが問題解決に導くこともあるということです。彼女も「今日は良いことをしてあげた」と気持ちよくなっていたかもしれません。

■ 持続可能な社会とSDGs

笑う人は健康寿命が長いとか。でも、笑わせる人はエネルギーをずいぶん使うため寿命が短いとか。人生100年と呼ばれる時代において、100歳まで長生きすることが目的か、それには至らなかったが本人が充実した時間を過ごしたと思えば幸せなのか、その答えは人それぞれかもしれません。ただ、今のように便利になった社会においてさえ、人は一人きりでは生きていけないのであれば、他人とある程度の接点を持った方がよいようです。

ところで、「持続可能な開発」が語られるようになって30年以上経ちました。時間と幸せに関連して、私たちが健康であること（病院などで処置できること）、家族を含む他人との関係が良いこと、自分自身が満たされていることなどは、ウェルビーイング（Well-being は、「幸福」とも「福祉」とも直訳される。世界保健機構による1946年の草案がもとになっている言葉。「健康とは、身体的、精神的及び社会的に良好な状態であって単に病気ではない、虚弱でないということではない」とされている）として捉えることができます。私たちのウェルビーイングは、個人の「持続可能な状態」の中でも重要

な意味を持ちます。自分ひとりではすべてを持続させることは大変難しいため、他の人に協力してもらって、自分も他人に協力して、何かをやるのが大切になります。同時に、自分ひとりでもできることは何だろうかと考え、実際に行動することも大切といえるでしょう。

これは、教育が万能薬のように語られる社会においても同様です。教育が直接的にすべての問題を解決できるわけではなく、教育では何ができるのかを考え、その考えを他の人と共有するのも大切となります。たとえば、「持続可能な社会」には、少なくとも社会における包摂、公正な経済、環境の保全という3つの要素が含まれます。最初の要素「社会における包摂」、つまり、異なる誰かとともに社会を作るという目的のためには、収入や富の不平等、法的な権利の上での差別、文化的・社会的な規範による差別という3つの課題を乗り越える必要があるとされます。このうち、教育が最も影響力を發揮できるのはどれでしょうか。いうまでもなく、3番目の文化的・社会的規範になります。

ここで、1968年にアメリカで実際に展開された事例を紹介しましょう。ある学校では「茶色の目をし

SDGs（エス・ディー・ジーズ）

Sustainable Development Goalsの略称。「持続可能な開発目標」と訳される。2015年から2030年までの先進国を含む国際社会全体で取り組む国際的な目標。

ESD（イー・エス・ディー）

Education for Sustainable Developmentの略称。「持続可能な開発のための教育」と訳される。持続可能な社会づくりの担い手を育む教育のこと。地球に存在する全ての生物が、遠い未来までその営みを続けていくために、環境・貧困・人権・平和・開発といったさまざまな地球規模の課題を、自らの問題として捉え、一人一人が自分のできることを考え実践していくこと（例えば、think globally, act locally）を身に付け、課題解決につながる価値観や行動を生み出し、持続可能な社会を創造していくことを目指す学習や活動を指す。

た子どもは、青い目を持つ子どもより優れている。青い目の子どもは劣った人のシンボルを首にかけられるように」という強い文化規範が共有されていました。しかし、ある時「私たちは間違っていた。逆に青色の目の子どもが優れている」と規範が逆転しました。青い目の子どもたちは、最初は首にかけたシンボルのためテストもうまくいきませんでした。逆転してシンボルを取り払った後は短い時間

間で問題を解けるようになりました。この教育実践には賛否ありますが、子どもたちは強烈な実体験をしたために他人への差別意識が低くなったとされています。

2015年に国連で採択された持続可能な開発目標(SDGs)は、2030年までに達成することを掲げた国際目標です。その本質は「誰一人も取り残さない」とされ、教育に関する目標は第4番目に位置づけられています。その第4目標の中、7つ目の項目では、次のようなターゲットが綴られています。

「2030年までに、すべての学習者が持続可能な開発を促進するために必要な知識と技能を獲得することを保障する。それは、持続可能な開発のための教育および持続可能なライフスタイル、人権、ジェンダー平等、平和と非暴力の文化の促進、グローバル・シティズンシップ、文化的多様性と持続可能な開発への文化の貢献を正当に捉えることを通してなされる(国連Webサイトより著者訳)」

長い年月をかけて練り上げられたこの項目では、すべての単語が重要なのですが、今回ここで注目したいのは、「持続可能な開発のための教育」と「持続可能なライフスタイル」です。それら二つは、「正しい」または「間違っている」という判断基準でき



BSP 国際合宿で活躍するスタッフの生徒たち (©丸山英樹)

れいに分けられるものではありません。

たとえば、ドイツ人の規範と日本人の規範が異なるとしたら、もしくは、「茶色の目と青い目」のように人為的に区別されているとしたら、どうなのでしょう。

■ 持続可能な開発のための教育(ESD)とライフスタイル

ESDは国連によるイニシアチブとしては2005年から2014年まで展開され、その拠点校としてユネスコスクール・ネットワークが位置づけられました。その後、日本は1000校を超えるユネスコスクール・ネットワーク登録数という成果を示すことができました。ただ、国際比較をしてみると、二つの特徴が見られました。一つは、小学校ではかなり教科を超えた取り組みが展開されたのですが、中学校以上では教科教育の枠は強く、その教科を通していわゆる応用力を伸ばすことが求められたようです。もう一つは、学校の内部で完結した事例が少なくなかった点です。これは大きな課題だと私は考えます。なぜならば、ユネスコスクール・ネットワークは、特に学校と学校が様々な境界を超えて直接つながることができる特徴を持つため、実践を展開する先生に大

異なる力を合わせて、自分と他人を持続可能に

きな権限が与えられることが多々あるためです。

一般的に、ネットワークにはいくつかの形があります。そのうち、メリットを生み出すものとして、似た者どうしによるグループの結束と異なるグループがつながる連携を紹介しましょう。似た者どうしでつながることは心地よく、効率的にものごとも進みます。ですが、そのグループ内のルールが厳しくなったり、ルール違反した人やグループ外の人を拒絶することがあります。効率的に進めていても、目標や条件が変わったりすると、その変化についていけないこともあります。他方、異なるグループであっても拒絶せずに、特定の目標や条件が合えば連携することもあるでしょう。最も異なる集団が接点を持つことは、時にとても辛い思いをすることもあります。自分の足りないものを補完したり、新たな発見につながったり、手に入らなかったであろう何かにか手が届くこともあります。

世界のユネスコスクール・ネットワークの中で、2019年に活動継続30周年を迎えるものがあります。それは、私が10年ほど研究対象としている「バルト海」プロジェクト（Baltic Sea Project: BSP）です。ベルリンの壁が崩壊した1989年、お互いを悪魔のように扱っていた政治的イデオロギーを乗り越えて、BSPはバルト海の水質汚染という共通課題について注目した理科教師たちが始めたプロジェクトでした。いくつもある活動内容のうち、ハイライトの一つは3年に1回、バルト海に面した9カ国が持ち回りで開催する国際合宿です。2013年から準備を始めたエストニア共和国の順番の時に、私はその合宿に向けて中学生と高校生たちが準備と練習をしている姿を見てきました。

BSPに参加する生徒たちは、比較的恵まれた教育環境を背景に持つ子どもが多く、経済的あるいは社会的に「しんどい」状態ではないようです。それでも不登校がちであったり、民族的に少数派だった

り個性豊かな生徒たちは、自分の課題を数多く抱えていました。国際合宿を開催するにあたり、大人が考える以上に強いプレッシャーを感じて自信をなくし、英語ができないから自分は役に立たないとおびえたり、エストニアという小さな国がドイツなどの大きな国の前で霞んで見えたりと。全国から集まった彼女ら・彼らは、作業グループを作る時、最初は仲よしグループを作っていました。ですが、さらに大きな作業をするにあたり、連携をする必要に迫られます。その時、パートナーには、自分たちにはない得意技を持っているグループを選ぶように、仕向けられました。上手に生徒たちを誘導したのは、エストニアのNGO職員でした。その後、2015年にエストニアで開催された国際合宿は大成功に終わりました。先生をはじめ大人たちは裏方に徹しており、アクセントの強い英語であっても、生徒たちは堂々と合宿を仕切っていました。同時に、それに応じる他国からの多くの生徒たちが、さらなる連携を見せてくれました。

■おわりに— 違うことに意味がある

誰でも、自分が正しいと相手に認めてもらいたい時があります。なのに、自分は正しいと思っていても、そうとは思わない人と遭遇することが、インターネットなどのせいで増えているのかもしれませんが。生命や人の尊厳や、人類共通のことがらについては正しいか否かを争う価値はあるでしょう。しかし、正義をふりかざして、自分も相手も疲れきってしまうのは、どうなのでしょう。グローバル化がより進み、自分の常識が通用しない場面が増えるようなら、せめて自分の元気は奪われないように自己防衛も必要かもしれません。あるいは思い切って、自分と異なる考え方の人と連携することで、道は開けるかもしれません。時にユーモアをはさみながら、違う人とのつながりを楽しむのはいかがでしょうか。

カメラを通した生活科

～お気に入りのボツ写真から～

カメラマン

齋木 三佳子

平成元年の学習指導要領改訂から登場した生活科。教科書は、平成4年から発行をスタートしました。次の新しい教科書は令和2年度版となります。今回は、生活科教科書の撮影を20年以上撮り続けている齋木三佳子カメラマンに、教科書に掲載されなかったお気に入りの写真とともに、生活科について語っていただきました。

——最初に生活科の撮影をしたときの印象について教えてください。

最初、教科名の印象から、座学で学んでいくような堅いイメージをもっていました。でも撮影が始まると、それは一転しましたね。実際に公園や公共施設に足を運んだり、自ら自然に触れ合ったりすることがとても大切であることを教えてくれる教科だなと思うようになりました。

野原で撮影をする設定でも、子どもたちは「ここでどうやって遊んだらいいの?」と、とまどったり、自然には目もくれず、当時流行っていたカードゲームで遊んだりしていました。でも、撮影を重ねていくうちに、自然でどう遊んでよいかかわからない状態なんだと気付きました。少し草遊びを教えてあげると、ゲームに夢だった子ども楽しそうに自然で遊びます。大人が少し背中を押すことの重要性を感じましたし、その役割を教科書が担っているんだと思いました。

——今回の撮影はどんな雰囲気で行われましたか。また撮影を重ねていく中で変わったことはありましたか。

今回は、二年間かけて同じ子どもたちを追ったので、彼らの成長が目に見えて新鮮でした。手をつないで歩く場面を撮影しようとする時、ある時



期から女の子が男の子を意識し始めるんですね。前回までは、すぐにつないでいたのに。意識の芽生えを感じました。①の写真は、お気に入りの写真の一枚です。ほかの写真と見比べると、とても幼く感じるのではないのでしょうか。というのも、この日彼らは初めて出会いました。最初はぎこちない雰囲気でしたが、すぐに打ち解けて仲よくなりました。彼らの中で新しいコミュニティが形成されていく姿に感動しました。

——撮影中に気をつけているポイントはありますか。

一番大切にしていることは待つことです。子どもの自然な表情を撮るには彼らが活動に夢中になっている必要があります。どうしても大人は、



子どもにすぐ答えを与えたり、指示を出してしまいがちです。それをなんとか抑えて、子どもたちが楽しんだり、ああでもない、と試行錯誤したりするまで待つ。その時の子どもの表情はとて輝いているんですよ。そんな姿を撮ることを軸に取り組んできました。そんな写真が、②③の写真です。二枚とも子どもの表情が本当に輝いていると思いませんか。活動一つ一つを楽しみながら取り組んでいる姿は撮る側としても撮りがいがありますね。

—— 今後の目標と最後に一言あればお願いします。

今後の目標は今までと変わらず、子どもたちの生の姿をフレームに収めていくことです。ご紹介した三枚は教科書では掲載されていない、いわゆ

るボツ写真ですが、どの写真もそれぞれのエピソードをもっています。教科書を通して、繰り返し、写真を見ていただくと嬉しいです。



齋木 三佳子カメラマンプロフィール
1996年よりカメラマンとして活躍。子どもの躍動感ある一瞬をとらえることで定評がある。



第17回

まもなく締め切り!!

地球となかよし メッセージ 作品募集 (2019年度)

「地球となかよし」という言葉から感じたり、考えたりしたことを、
写真(またはイラスト)にメッセージをつけて表現してください。

応募者全員に
参加賞が
もらえるよ!

応募資格	小学生・中学生(数名のグループ単位での応募も可)
応募期間	2019年7月1日～9月30日 詳細は「優秀作品展示室」とあわせてホームページをご覧ください。
作品テーマ	①身のまわりの自然が壊されている状況を見て感じたことや、自然環境や生き物を守るための取り組み ②さまざまな人との出会いを通して、友好の輪を広げた体験、異文化交流、国際理解に関すること ③その他、「地球となかよし」という言葉から感じたり、考えたりしたこと



前回
入選作品

四季のある日本

私たちが住んでいる地球。その中でも、私が住んでいる日本には、春夏秋冬という四季があります。その事により、旬の食べ物や、その時期にしか見られない動物や植物がたくさんあります。そして、夏は暑く、冬は寒いといった特徴もあります。

しかし最近では、地球温暖化により、少しずつ季節がくるっているように感じます。

これから先も、地球に住みつづける私たちが、四季を感じながら生きていくには、地球をよごさず、動物や植物を大切にしていくなが必要があると、ポスターをかいたことにより、あらためて気づくことができました。(小学4年)

◎主催／教育出版 ◎協賛／日本環境教育学会
◎後援／環境省、日本環境協会、全国小中学校環境教育研究会、毎日新聞社、毎日小学生新聞
*協賛・後援団体は昨年実績で、継続申請中です。

応募の決まりなど詳しくはホームページを見てね
<https://www.kyoiku-shuppan.co.jp/>

教育出版 「地球となかよし」事務局 TEL. 03-3238-6862 FAX. 03-3238-6887
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-10

生活科・総合通信 そよかぜ通信 【2019年 秋号】2019年8月31日 発行

編集：教育出版株式会社編集局
印刷：大日本印刷株式会社

発行：教育出版株式会社 代表者：伊東千尋
発行所：教育出版株式会社
電話 03-3238-6864 (内容について)
03-3238-6901 (配送について)

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-10
URL <https://www.kyoiku-shuppan.co.jp>

**地球となかよし
なかよし宣言**

わたしたちをとりまく自然や社会は、科学技術の進展や国際化、情報化、高齢化などによって、今、大きく変わろうとしています。このような社会の変化の中で、人間や地球上のあらゆる命のがびのびと生きていくためには、人や自然を大切にしながら、共に生きていこうとする優しく大きな心をもつことが求められています。

わたしたちは、この理念を「地球となかよし」というコンセプトワードに込め、社会のさまざまな場面で人間の成長に貢献していきます。

- 北海道支社 〒060-0003 札幌市中央区北三条西3-1-44 ヒューリック札幌ビル6F
TEL: 011-231-3445 FAX: 011-231-3509
- 函館営業所 〒040-0011 函館市本町6-7 函館第一ビルディング3F
TEL: 0138-51-0886 FAX: 0138-31-0198
- 東北支社 〒980-0014 仙台市青葉区本町1-14-18 ライオンズプラザ本町ビル7F
TEL: 022-227-0391 FAX: 022-227-0395
- 中部支社 〒460-0011 名古屋市中区大須4-10-40 カジウラテックスビル5F
TEL: 052-262-0821 FAX: 052-262-0825
- 関西支社 〒541-0056 大阪市中央区久太郎町1-6-27 ヨシカワビル7F
TEL: 06-6261-9221 FAX: 06-6261-9401
- 中国支社 〒730-0051 広島市中区大手町3-7-2
あいおいニッセイ同和損保広島大手町ビル5F
TEL: 082-249-6033 FAX: 082-249-6040
- 四国支社 〒790-0004 松山市街道3-6-1 岡崎産業ビル5F
TEL: 089-943-7193 FAX: 089-943-7134
- 九州支社 〒812-0007 福岡市博多区東恵比寿2-11-30 クレセント東福岡 E室
TEL: 092-433-5100 FAX: 092-433-5140
- 沖縄営業所 〒901-0155 那覇市金城3-8-9 一粒ビル3F
TEL: 098-859-1411 FAX: 098-859-1411

本資料は、文部科学省による「教科書採択の公正確保について」に基づき、一般社団法人教科書協会が定めた「教科書発行者行動規範」ののっとり、配付を許可されているものです。